

当院で Array Comparative Genomic Hybridization (aCGH)法による着床前診断を実施した 3 症例

赤松芳恵 中岡義晴 中野達也 松本由香 森本義晴

【緒言】最近新たな着床前診断の方法として Array Comparative Genomic Hybridization (aCGH) 法が導入され始めている。この方法は複数の細胞を採取し検査に用いることが可能であり、さらに DNA の増幅をすることで従来行われてきた FISH 法に比べて診断精度の向上が期待できる。当院でも日本産科婦人科学会の承認を受け、3 症例で実施したので、その結果を報告する。【症例 1】妻 35 歳 46,XX、夫 32 歳 46,XY,t(4;5)(q21;q35) 過去 2 回の自然妊娠、流産を経て当院受診。H24.6~H25.4 までに 4 回の体外受精、着床前診断を実施した。1 回目実施時に 2 個の正常な胚盤胞が得られ 2 度移植するも妊娠に至らず。2 回目、3 回目で得られた胚盤胞は異常と診断され移植できなかった。4 回目実施時にも 1 個の正常な分割期胚が得られ移植したが妊娠には至らなかった。これまで通して 9 個の胚から biopsy し、うち 3 個が正常、6 個が異常であった。転座に起因する異常は 3 個に認めた (33.3%)。【症例 2】妻 39 歳 46,XX,t(7;8)(q21;p22)、夫 44 歳 46,XY 過去 4 回の自然妊娠、流産を経て他院で PGD を 2 回受けるも妊娠に至らず、当院受診。H24.2 体外受精、着床前診断を実施した。得られた 3 個の胚盤胞はいずれも異常と診断され移植できなかった。転座に起因する異常は 2 個に認めた (66.7%)。【症例 3】妻 32 歳 46,XX、夫 30 歳 46,XY,t(6;14)(p21.3;q32.3) 過去 5 回の自然妊娠、流産を経て他院より当院紹介受診。H24.3 体外受精、着床前診断を実施した。得られた胚盤胞 6 個はいずれも異常と診断され移植できなかった。転座に起因する異常は 5 個に認めた (83.3%)。【まとめ】すべての症例において正常率は低かった。しかし異常と診断された胚の全てが必ずしも転座に起因するものではなかった。